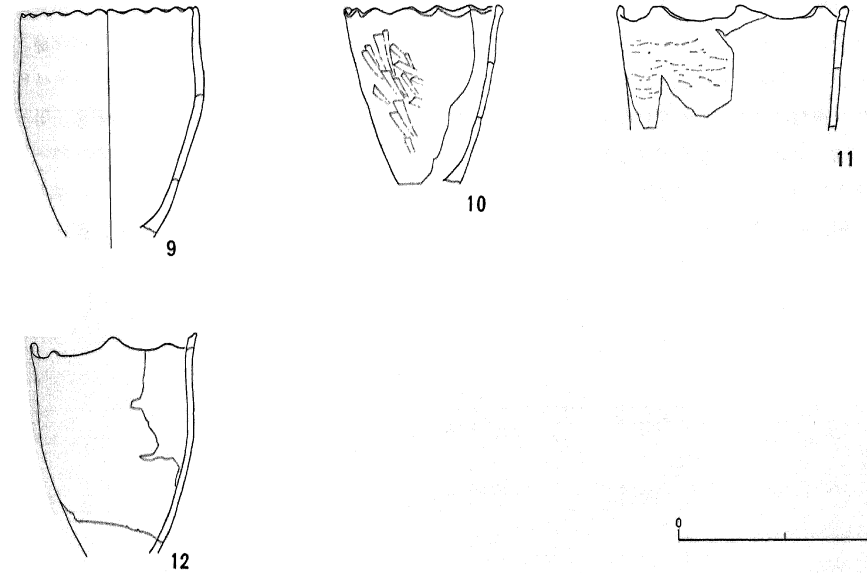


第27図 第8号住居址出土土器(1)



第28図 第8号住居址出土土器(2)

出土遺物のうち、実測が可能なものは第27・28図のように12個体分で、これらのうち有文のもの7個体、無文のもの5個体であった。

1は口縁部がやや内湾した平縁の深鉢形土器で、口縁部に入組文、胴部には羽状沈線文がそれぞれ施されている。

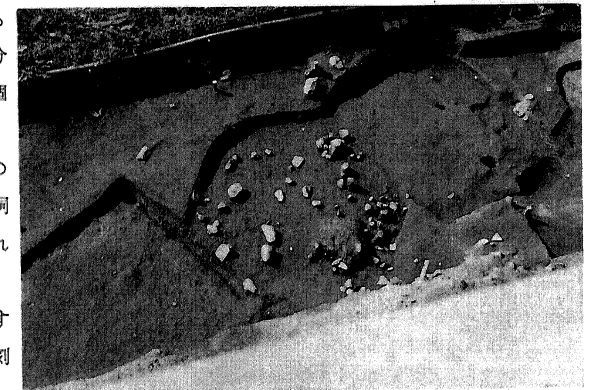
2は口縁部4単位の小波状を呈する深鉢形土器で、口唇部直下に有刻突帯文が巡らされ、口縁部文様帯から口唇部文様帯が分離され、三叉

文・三叉状入組文がそれぞれ施されている。また、胴部には羽状沈線文がみられる。

3は口縁部4単位の突起状の波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇部直下に有刻突帯が巡り、口唇部文様帯と口縁部文様帯に沈線文・流水状の入組文がそれぞれ施されている。

4は口縁部5単位の波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇部直下に有刻突帯が巡らされ、口唇部文様帯と口縁部文様帯に沈線文・流水状の入組文がそれぞれつけられている。

5は波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇部直下に有刻突帯が巡り、口縁部に三叉文状入組文が施されている。



第29図 第8号住居址(第3次調査)

考古

6は口縁部波状口縁を呈する深鉢形土器で、口縁部に三叉状入組文が施されている。

7は波状口縁を呈し、最大径を胴下半に有する深鉢形土器で、口縁部には有刻突帯によって区画が施され、その間隙に三叉文・刺突文がみられる。

8は口縁部に5単位の小突起を有する無文の深鉢形土器で、口唇部直下に有刻突帯を有する。

9～12は口縁部小波状を呈する無文の深鉢形土器である。

本住居址から出土した石器としては、1・2が黒曜石製の石鏃、3・4はスクレイパーで、3はチャート製、4は黒曜石製のものである。5～8は頁岩製の打製石斧、10・11は安山岩製の石皿の破片である。

(2) 配石遺構

検出された配石遺構は、調査範囲が限定されていたために、その全容は明らかにすることはできなかったが、積石状・集石状・列石状・小サークル状・組石状などの配石遺構群から構成されていた。

第30図は、イ地区第Ⅶ層中の配石遺構で50～70cm大の河原石を中心に、10～15cm大の扁平な礫が、それぞれ集中して認められた。また、本地区第Ⅸ層において人骨3体分が検出された。

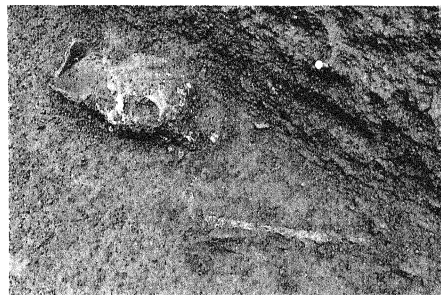


第30図 イ地区第Ⅶ層中の配石遺構

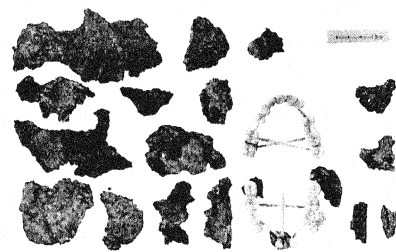
本配石遺構では、第Ⅶ層中では縄文時代後期加曾利B式土器を主体とした土器片が、第Ⅷ～Ⅸ層では同時代中期曾利式土器片が出土した。

第31図は、本地区第Ⅸ層で検出された人骨で、頭骨下には曾利Ⅲ式土器片が敷かれていた。人骨は土壇内から検出され、頭骨より肩甲骨・上腕骨・肋骨までが確認されたが、それ以下は調査対象地の外に伸びていたために確認できなかった。

第32図は取り上げた人骨であるが、保存状態が極めて悪く、辛うじて歯のみが原形を留めていた。この人骨は11才前後の小児骨と推定されている。この他に、同地点からは壮年期の女性の骨、3才前



第31図 第4号址人骨出土状態



第32図 第4号址出土人骨

後の幼児骨が検出されている。

第33図は、ロ地区第Ⅶ層中の配石遺構で、直線的に河原石が配され、また、配石遺構北側で焼土が3か所認められた。

出土遺物は、第Ⅶ層中に最も多く、次第にその量を減らす。土器の内容は、縄文時代後期加曾利B式～同時代晩期清水天王山式土器が大半を占めている。

土器以外のものとしては、耳飾り2点・土製円盤3点などの土製品や、石鏃13点、スクレイパー1点、打製石斧1点、磨石2点などの石器類が出土した。

第34図は、ハ地区第Ⅶ層中の配石遺構で、長径約2m、短径1.3mの楕円形状に約20～50cm大の河原石が配され、その区画された内側に石棒が倒れた状態で出土した。

また、石棒の基部付近には10cm大の礫4個が基部を取り囲んでいたかのような状態で認められた。これは、とくに、石棒を主体とした祭祀・信仰を感じさせる遺構であった。

(3) 歴史時代の住居址

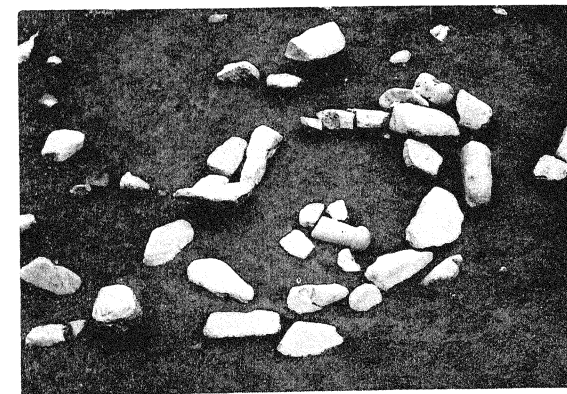
調査では、縄文時代の遺構の他に、奈良時代の住居址が2軒検出されている。

このうち、第1号住居址は長軸約4m、短軸3mの横長の長方形プランを呈する。

壁は、南・北側が垂直に、東・西側は緩やかに、それぞれ立ち上がり、壁高は約50cmを測る。床面は堅緻なものであり、ほぼ平坦である。かまどは北壁中央よりやや東寄りに位置し、全長150cm、幅110cmで、残存状態は良好である。焚口部は床を径約75cmの円形に5cm掘下げてつくられている。袖部は右側3個、左側4個の石を芯材として組み、その上を粘土で覆っている。煙道右側にも2個の石が認められる。かまどの中央に径8cm、高さ22cm、断面不整八角形の粘土の支脚が認められた。

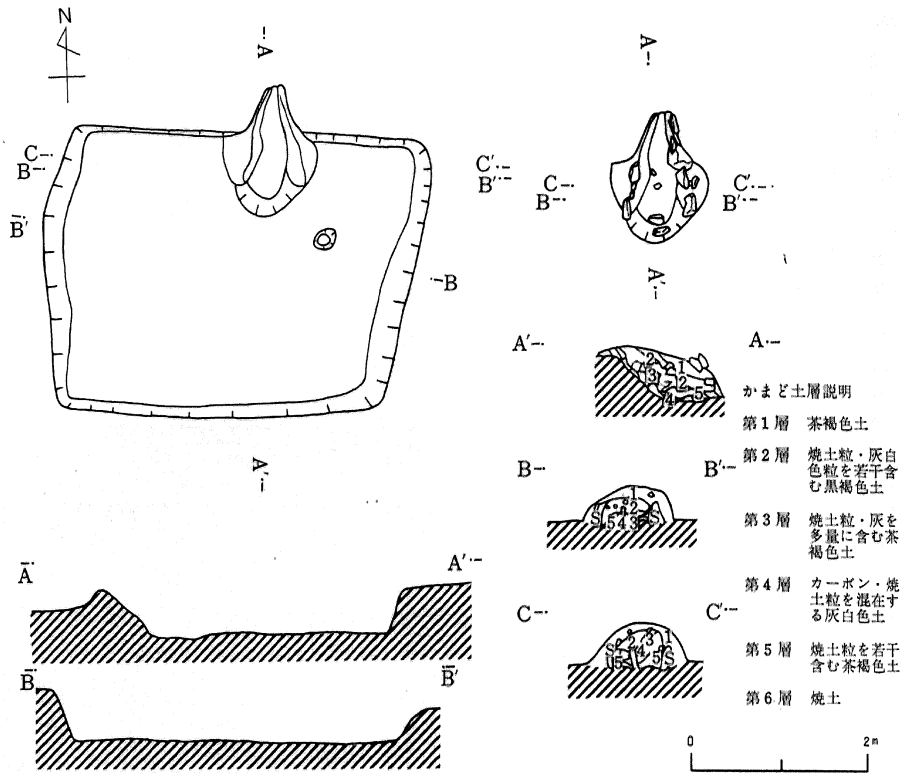


第33図 ロ地区第Ⅶ層中の配石遺構



第34図 ハ地区第Ⅶ層中の配石遺構

考古



第35図 第1号住居址遺構図

遺物(第36図一1~13)は、覆土中より土師器甕形土器3個体、同坏形土器2個体、須恵器甕形土器1個体、同坏形土器2個体、同蓋2個体がそれぞれ出土した。

これらのうち、4は美濃国衙官窯の製品と思われ、8世紀初頭に位置付けられるものと推定される。また、坏形土器(1~3)は下部に稜の痕跡を有するもので、器体下半から底部にかけて篋削りが施されている。

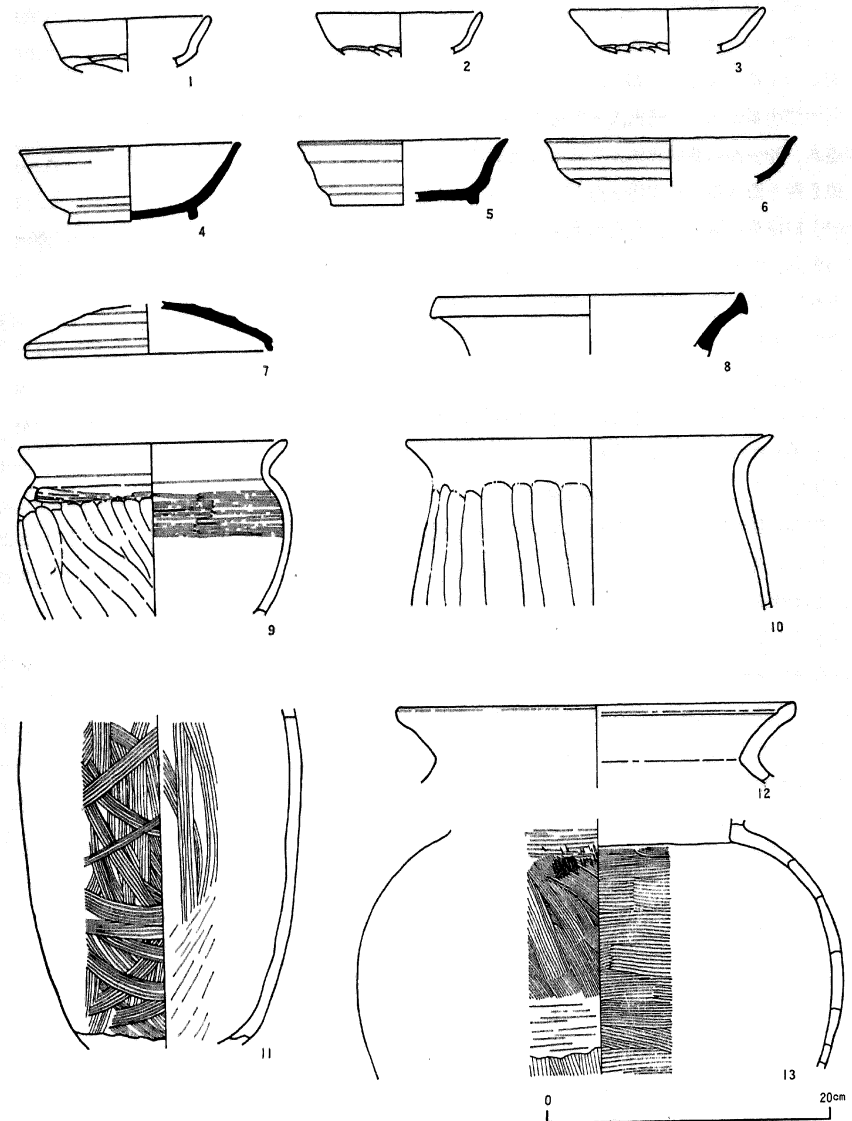
甕形土器(9~13)には、長胴甕(10・11)と球胴甕(12・13)が認められ、10は篋削り整形が、11は櫛状篋ナデがそれぞれ施されている。12・13は口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が若干肥厚した球胴甕で「駿東型」の甕形土器と思われる。

須恵器には、内面に「かえり」のない坏形土器の蓋(6)と、高台付坏形土器(4・5)が認められ、後者には底部が丸味を有するもの(4)、角のあるもの(5)とがみられた。

(4) 遺物

調査によって、縄文時代早期~同時代晩期までの土器が4,499点出土した。これらの内、1,204点は無文であったり、文様の判別が不可能のものであった。残り3,295点は第1~11群に類別された。

第1群土器(第41図一1)



第36図 第1号住居址出土土器実測図

縄文時代早期に属するもので、山形押型文土器片である。

第2群土器(第41図一2・3)

同時代前期末葉に属するもので、縄文(原体LR)を地文とし、結節浮線文が施され、十三菩提式比定されるものと思われる。

考古

第3群土器（第41図—4～8）

同時代中期初頭の五領ヶ台式に比定されるものである。

第4群土器（第41図—10～24）

同中期中葉に属する猪沢式・新道式・藤内式に比定されるもので、10～16は猪沢式、9・17・18は新道式、19～24は藤内式に、それぞれ比定される。

第5群土器（第43～49図—25～77）

同中期後葉に属する曾利式に比定されるもので、25～42は曾利Ⅱ式、43～59は曾利Ⅲ式、60～64は曾利Ⅳ式、65～77は曾利Ⅴ式に、それぞれ比定される。

第6群土器（第51図—89～100）

同中期末葉に属する加曾利E4式、同後期初頭に属する称名寺式に比定されるものである。

第7群土器（第53～57図—101～142）

同後期初頭に属する堀之内式に比定されるもので、101～119は堀之内1式、120～142は堀之内2式に、それぞれ相当するものである。

第8群土器（第57～69図—143～241）

同後期中葉に属する加曾利B式に比定されるものである。143～198・180・186～228・213～229は加曾利B1式、171～176・185・230～238は加曾利B2式、181～184・239～240は加曾利B3式に、それぞれ対比される。

第9群土器（第71～73図—242～261）

同後期末葉に属するもので、257・261は曾谷式、259は安行1式、242～246は高井東式に比定され、また、250・251・254は東海系の土器群、253は東北地方の瘤付き土器にそれぞれその系譜を求められるものと思われる。

第10群土器（第75～79—262～316）

同晩期前半に属するもので、262～293は清水天王山式土器、294～316は同時期の大洞式及び中部山岳地方の佐野式などに比定されるものである。

成果と課題

本遺跡は、過去3回の発掘調査が実施され、市内でも著名な遺跡となっているが、いずれの調査も部分的であったために、遺跡の全容について解明されるに至っていない。

このなかでも、第3次調査は、調査区が遺跡の傾斜に沿って南北にトレンチを入れたように設定されたために、遺構の配置など遺跡の概要を想定することが可能となった。これは、イ・ロ・ハ地区などの緩やかなスロープを描く斜面には配石遺構が構築され、とくに調査地区内で最も高い地点に位置するイ地区では、配石が集中し、ハ・ニ地区などの平坦部には住居址が構築されていることから、遺跡内でも平坦部には住居群が、また、仰ぎ見る小高い場所には配石遺構がそれぞれ構築されていたことが想定される。

〈清水天王山式土器の様相〉

本遺跡から出土した縄文時代晩期前半の土器群は、口縁部文様帯に入組文・三叉文が施され、胴部

に羽状沈線文が施されたものが主体を占めていた。これらの土器群は、清水天王山式土器と呼ばれる一群の土器であるが、この清水天王山式土器は静岡県清水市天王山遺跡で最初に注目され、静岡県東部・山梨県・神奈川県西部などの地域の晩期前半を構成する土器の名称であるが、その研究は端緒に着いたばかりであり、実態は不明な点が多かった。

しかしながら、本遺跡において、第8号住居址で一括資料が出土し、この資料の分析を通じて、清水天王山式土器と漠然と考えていた土器群にも、いくつかの系列が存在し、それはこの清水天王山式土器の形成過程からその系譜がたどれるということが明らかになってきた。

この清水天王山式土器は、後期中葉以降関東地方から中部・東海・北陸へと広く分布した胴部に羽状沈線文が施された土器群が母胎となり、後期末葉から晩期初頭にかけて東北地方から太平洋岸を伝わって来た入組文を主体とする土器群の直接的影響下に形成された土器群であり、このなかには胴部に依然と羽状沈線文が施されたより保守的な器種と、入組文を主体とした新たな器種とが認められ、各々変遷をとげるのである。

清水天王山式土器が形成されるのは晩期の初頭であるが、その分布圏を広げるのは次の段階になってからである。東北地方の大洞B—C式などの影響下に成立した鍵の手状入組文施文の土器が長野県北部方面から当地域に伝播し、これに伴いこの鍵の手状入組文施文の土器とともに清水天王山式土器は分布圏を拡大したのである。

そして、まもなく当地域ではこの清水天王山式土器は、鍵の手状入組文施文の土器と入れ替わりに衰退していくのである。

この清水天王山式土器の分布を調べてみると、山梨県を中心として、静岡県東部・神奈川県西部などに限られ、その分布の密度は山梨が最も高く、その中心地であったことが判る。

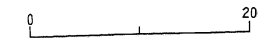
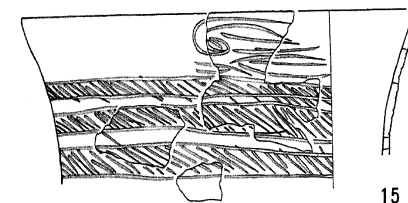
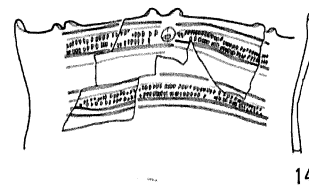
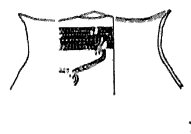
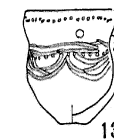
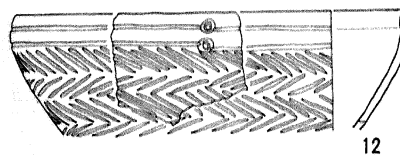
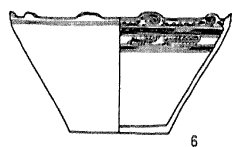
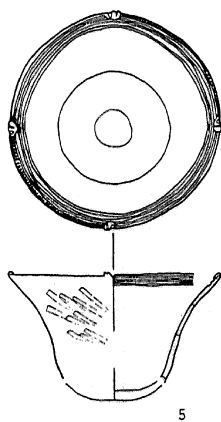
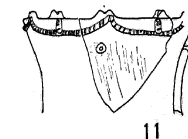
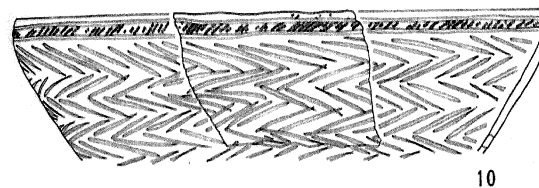
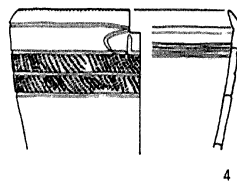
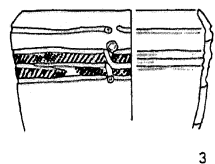
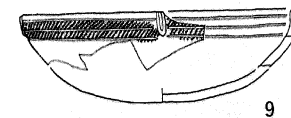
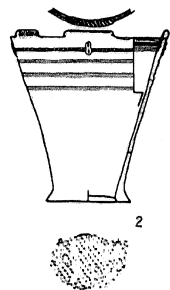
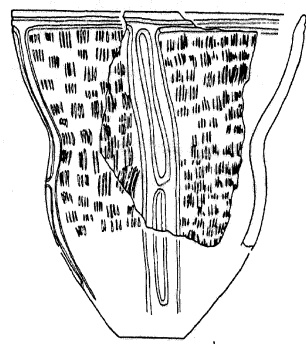
県内では、同時期の遺跡としては北巨摩郡大泉村の金生遺跡が有名であるが、同遺跡では全面調査が行われ、大規模な配石遺構群と集落址などが発見されている。また、配石遺構に伴い土偶・耳飾りなどが、かなり発見されている。ここで発見された土偶は板状のものがほとんどであり、東北地方の亀ヶ岡式土器に伴う遮光器形土偶、関東地方の安行式に伴う木菟形土偶とも様相が異なり、清水天王山式土器分布圏の独自のものとなっている。

中谷遺跡で出土した耳飾りを付けた土偶も板状のものであり、やはり清水天王山式土器に伴う土偶である。

本遺跡の調査は、前述のとおり面積的には限定されたものであったが、その内容は注目すべきものであった。

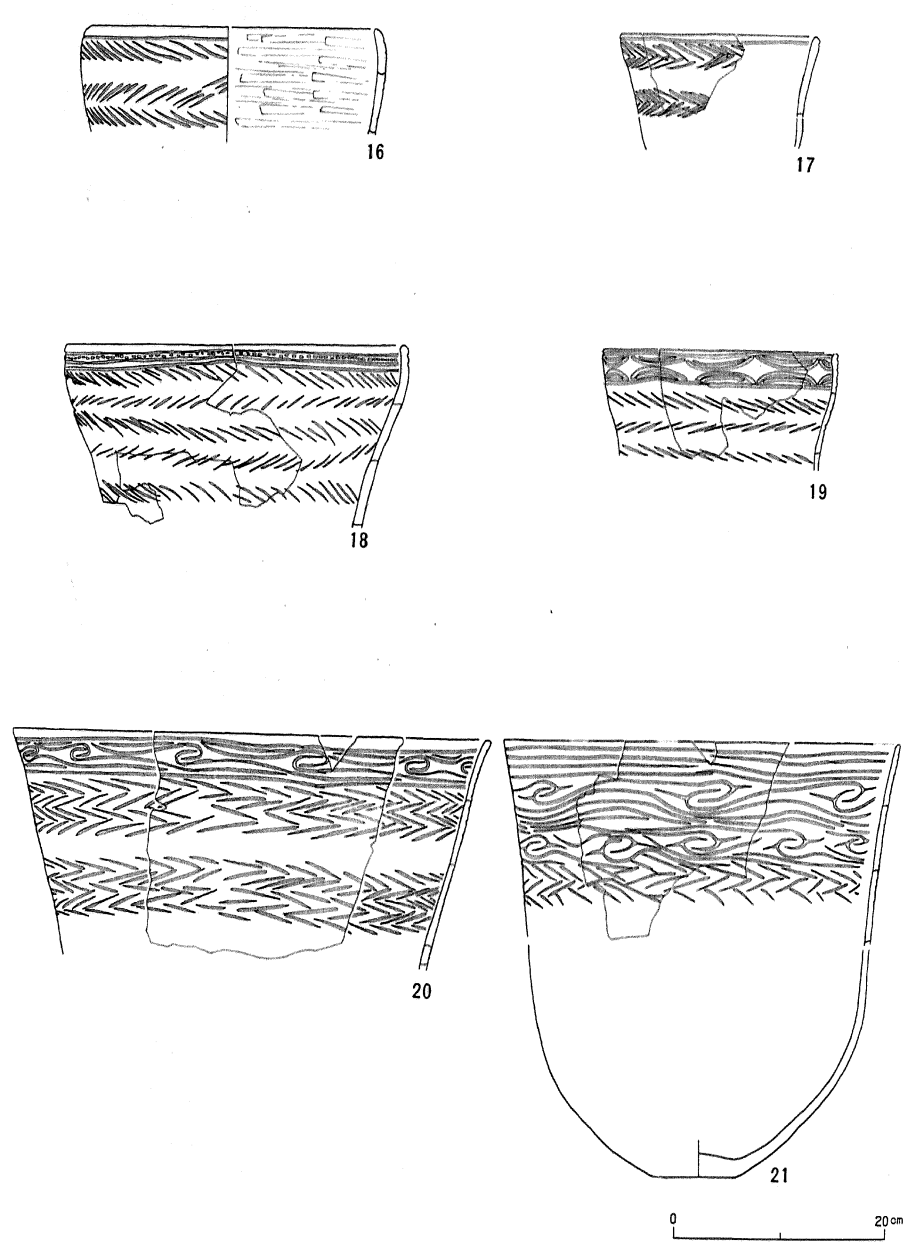
〈8世紀初頭の住居址発見〉

中谷遺跡の第3次調査で発見された第1号住居址は、出土した須恵器によって8世紀初頭に位置づけられ、この住居址が奈良時代のものであることが判明した。奈良時代の住居址は、市内では小形山の堀之内原遺跡、厚原の牛石遺跡で発見されているが、中谷遺跡第1号住居址はこれらに先行するものであった。

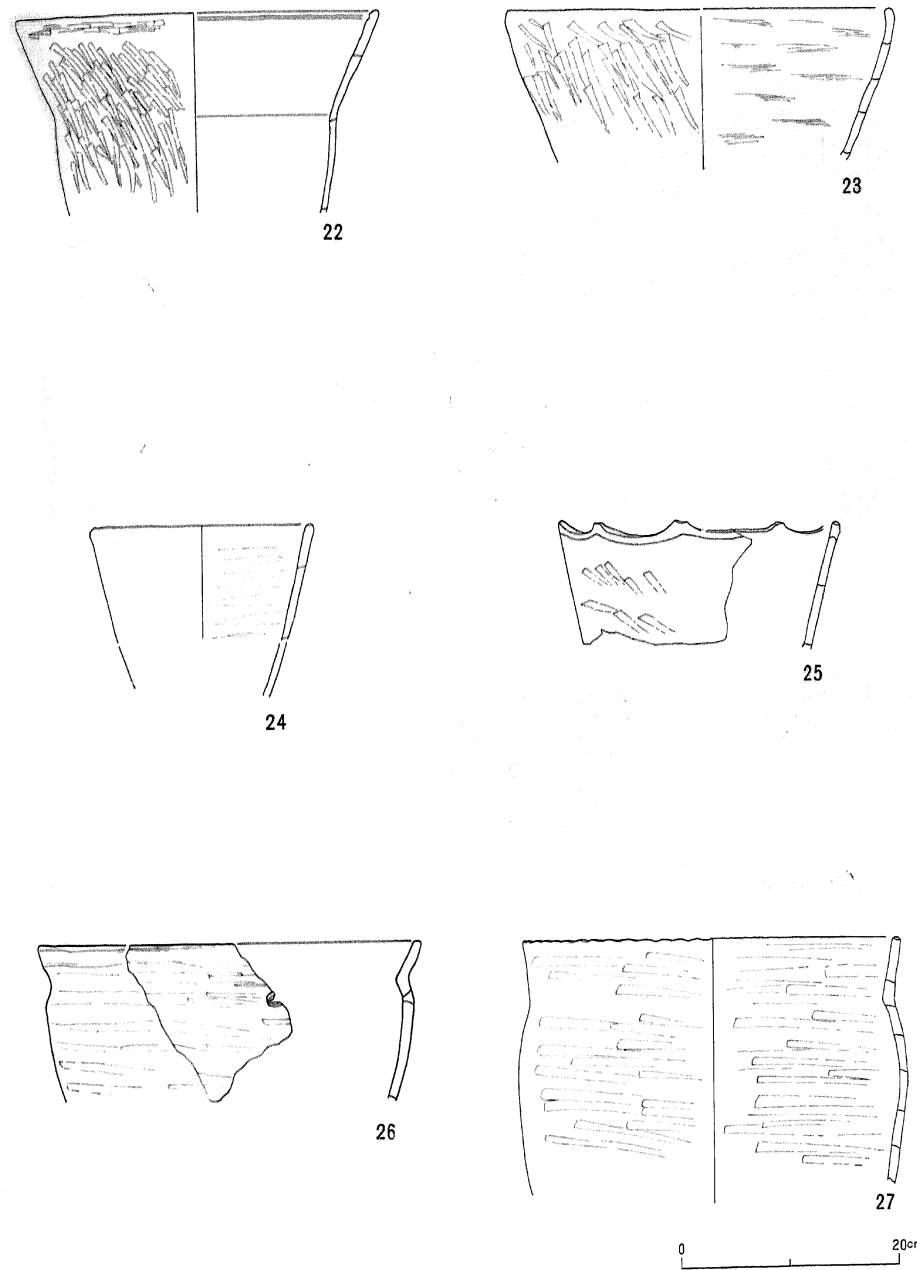


第37図 中谷遺跡出土土器実測図(1)

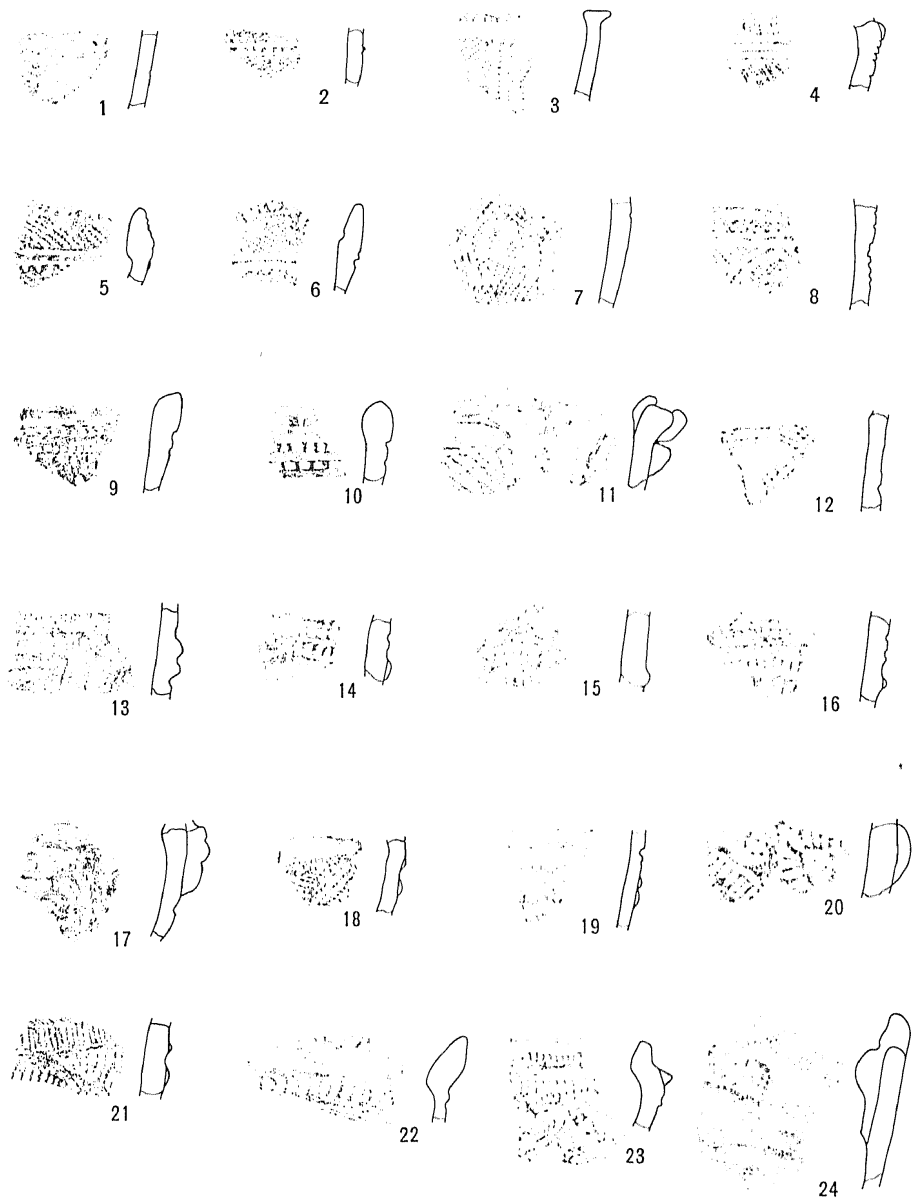
第38図 中谷遺跡出土土器実測図(2)



第39図 中谷遺跡出土土器実測図(3)



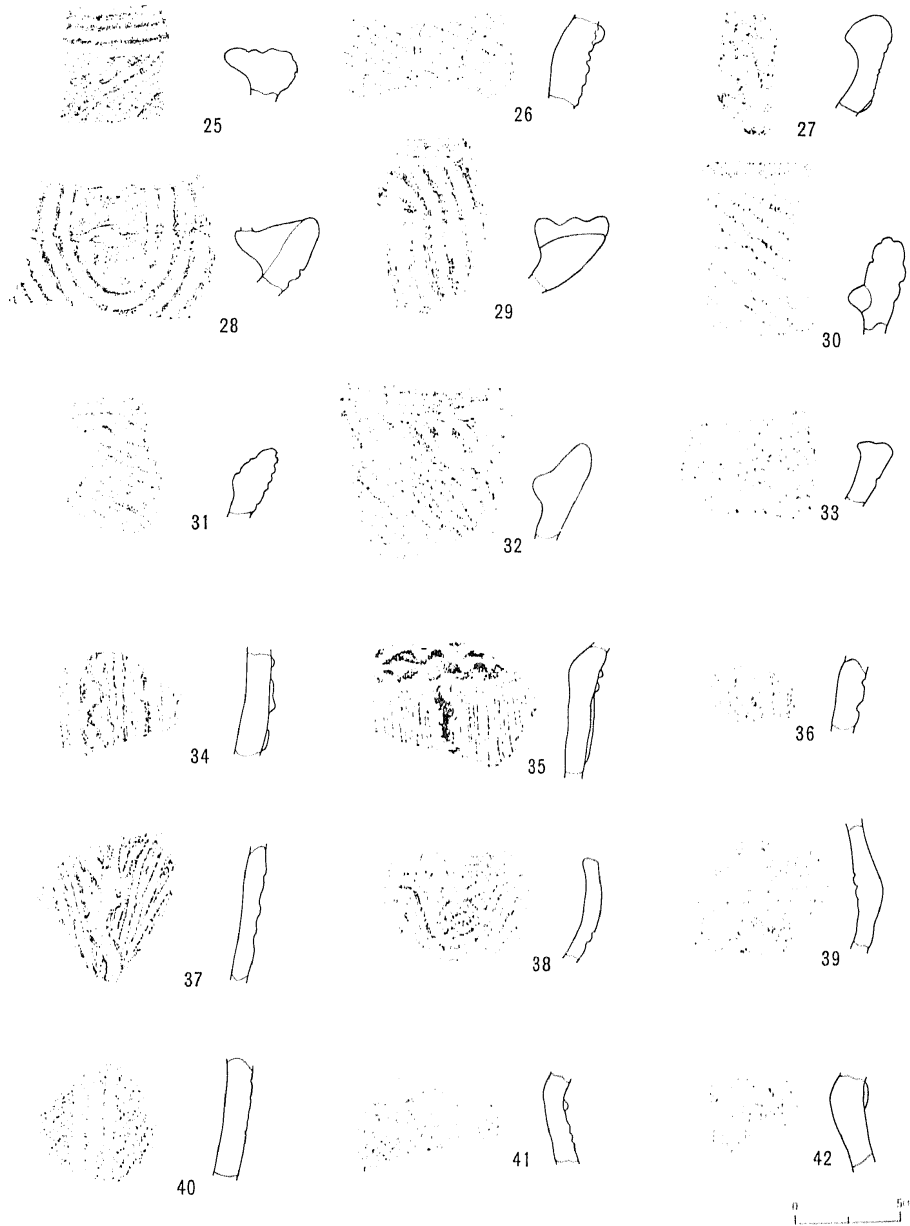
第40図 中谷遺跡出土土器実測図(4)



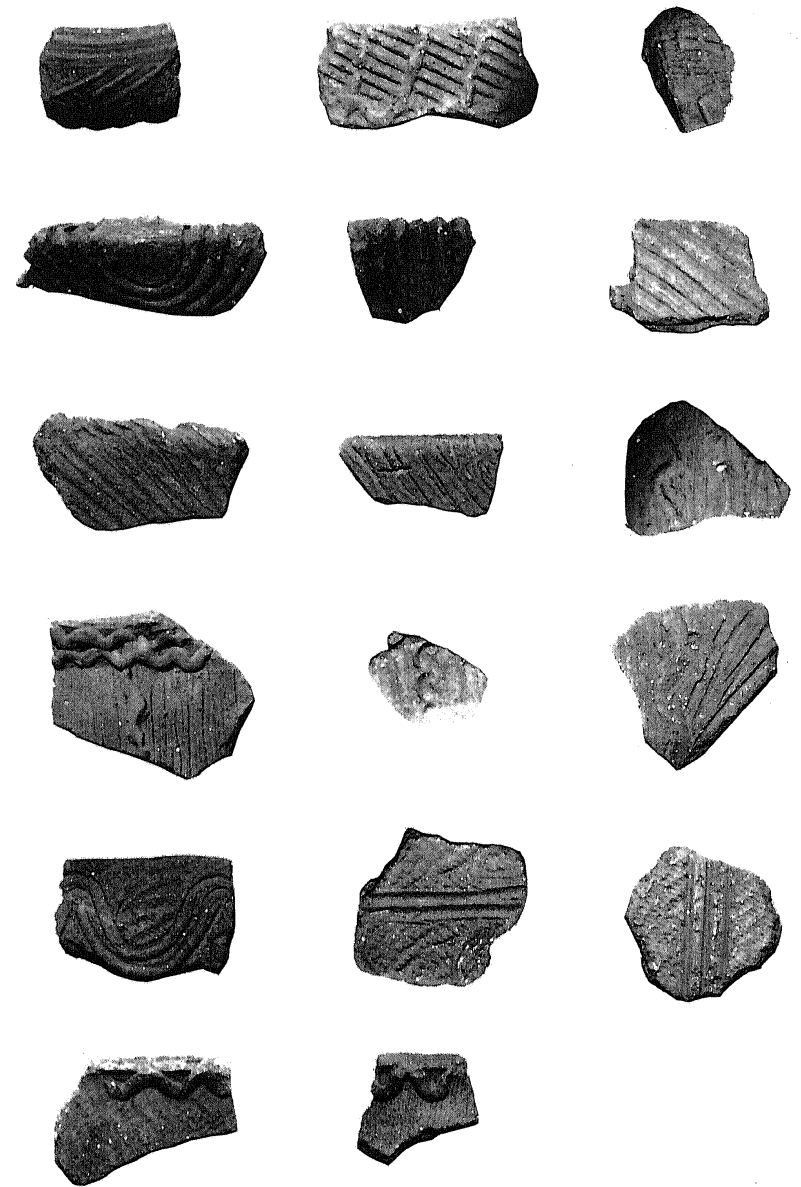
第41図 中谷遺跡出土土器拓写列(1)



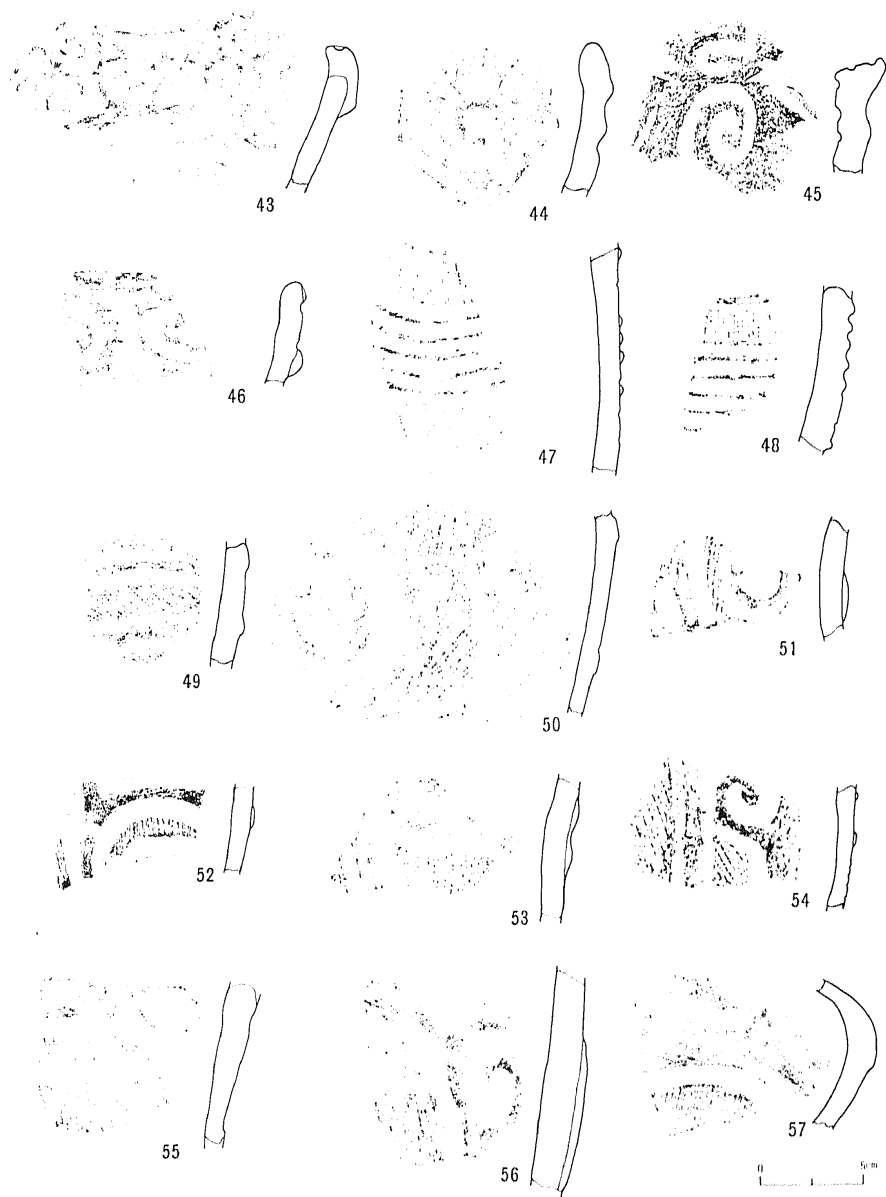
第42図 中谷遺跡出土土器



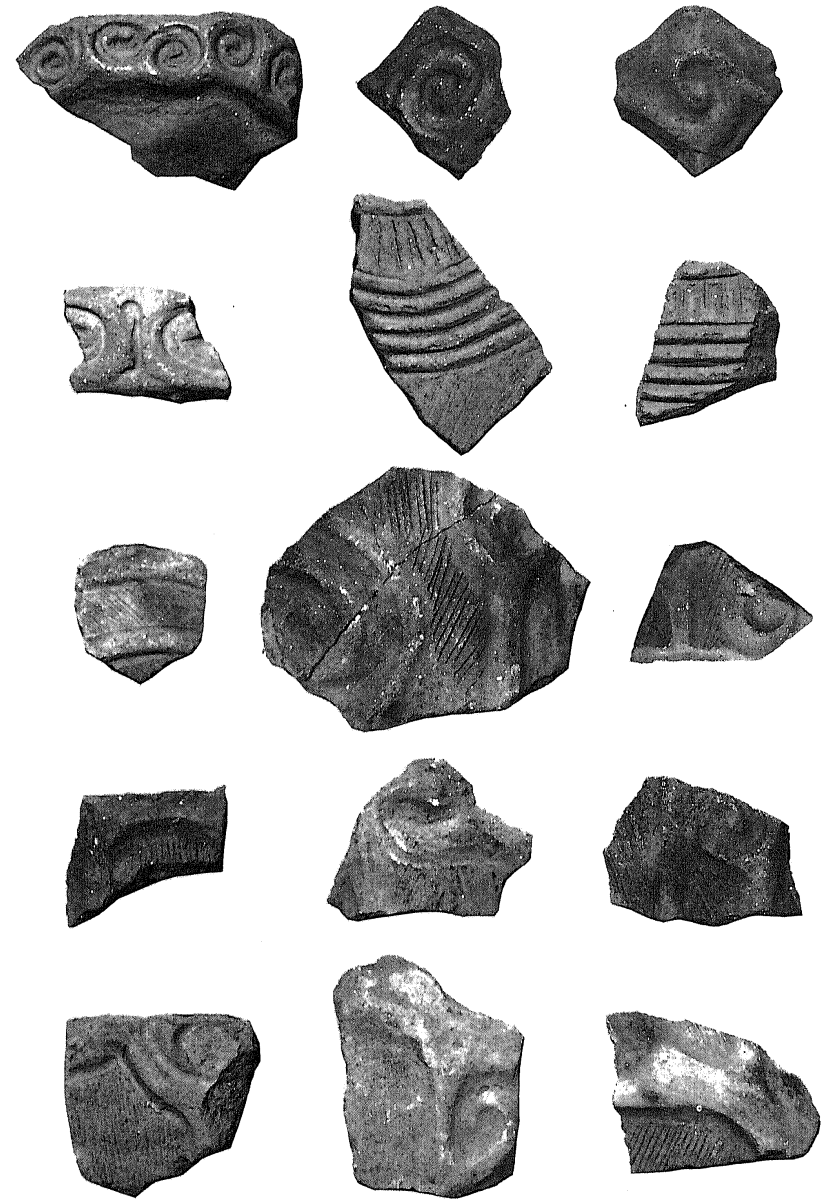
第43図 中谷遺跡出土土器拓写(6)



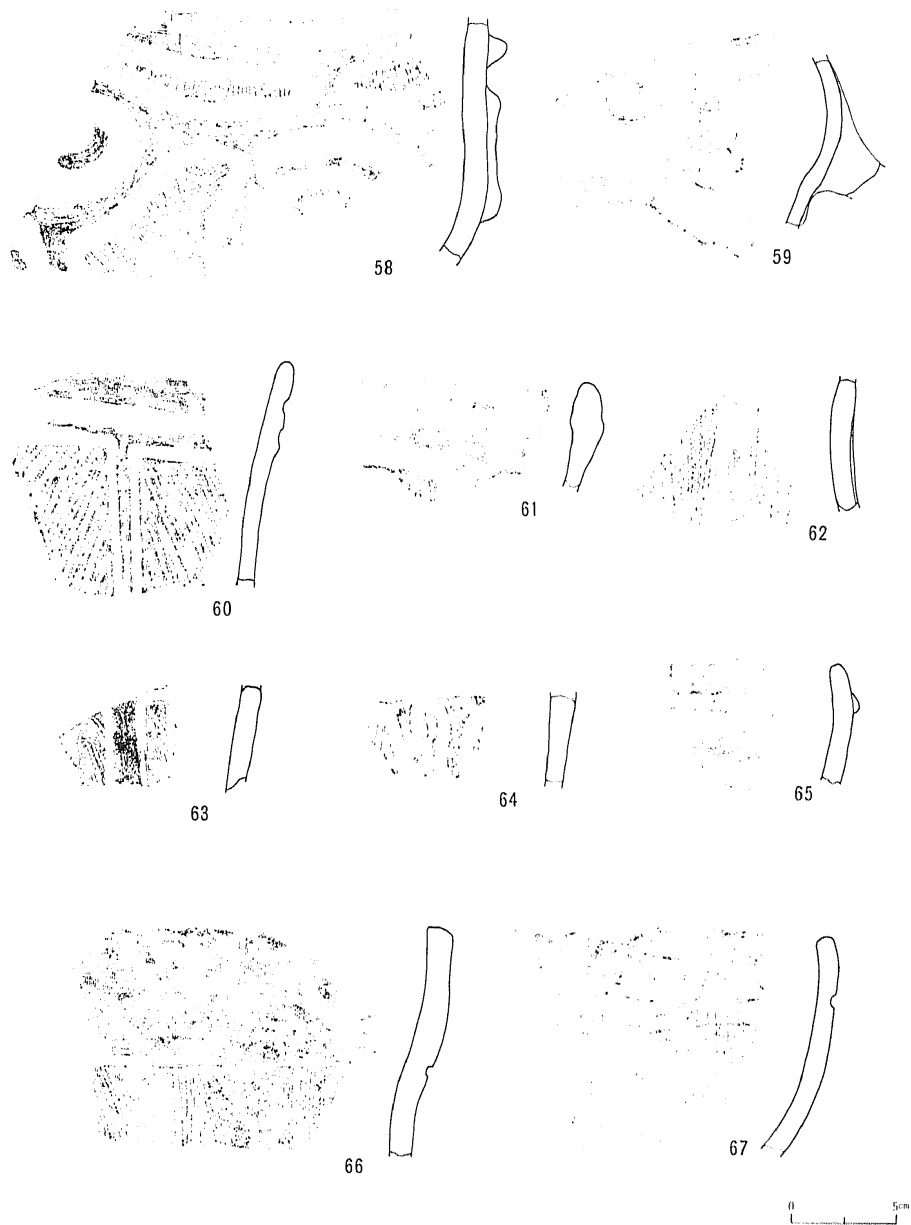
第44図 中谷遺跡出土土器



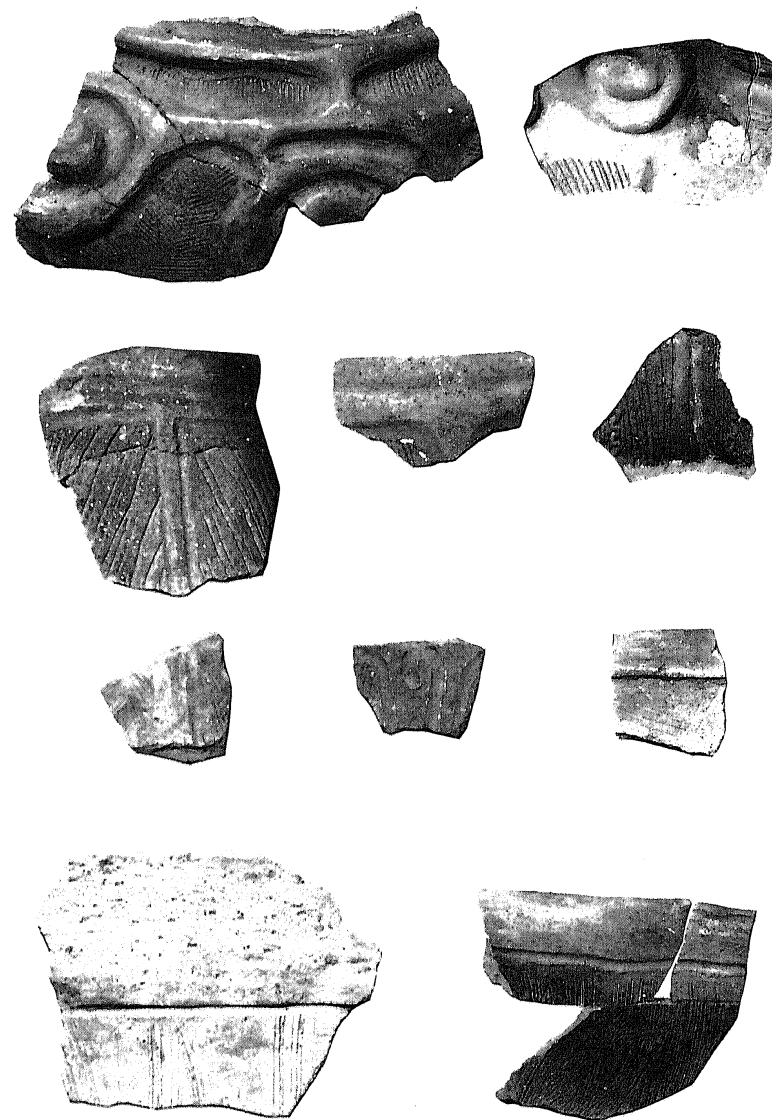
第45図 中谷遺跡出土土器打湿図(3)



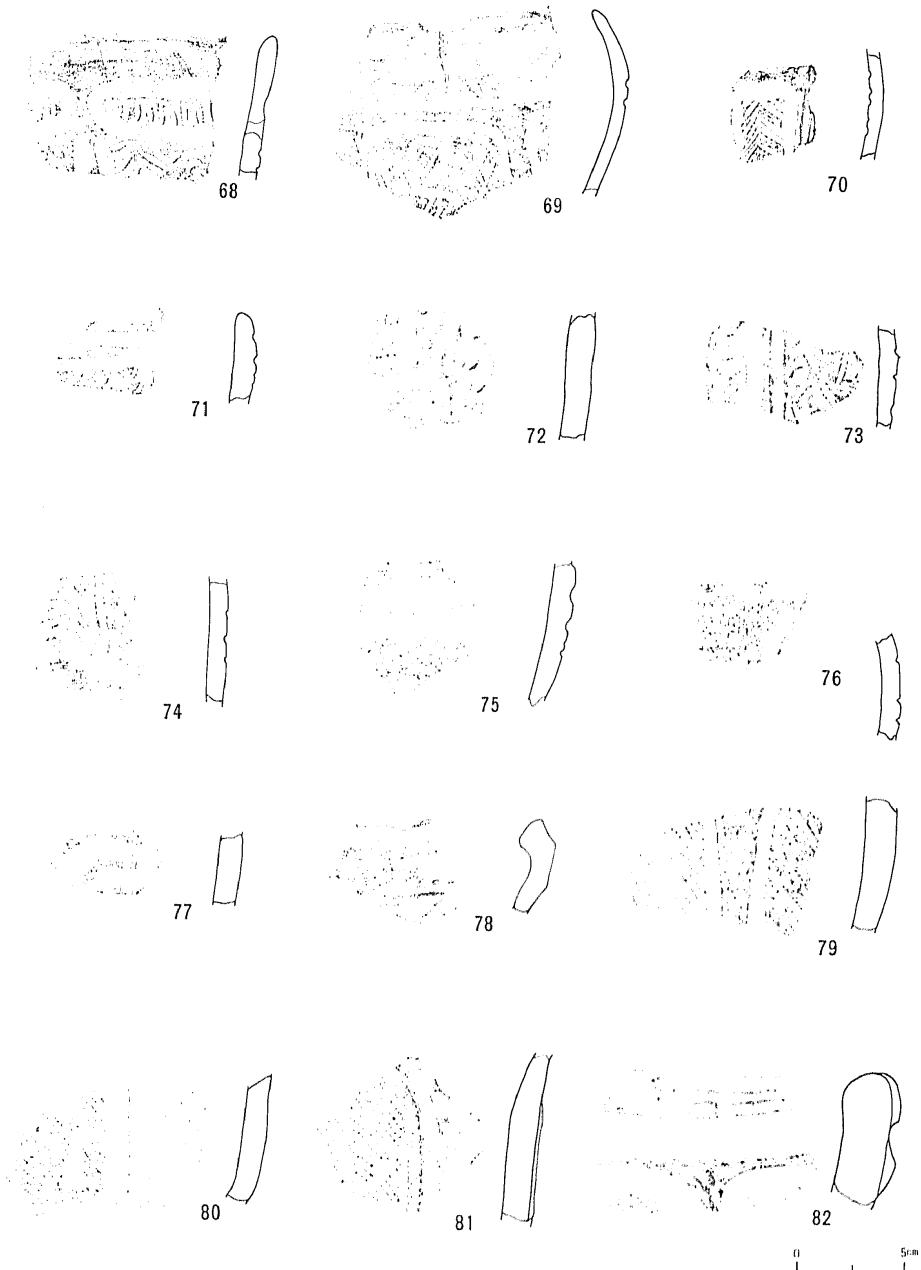
第46図 中谷遺跡出土土器



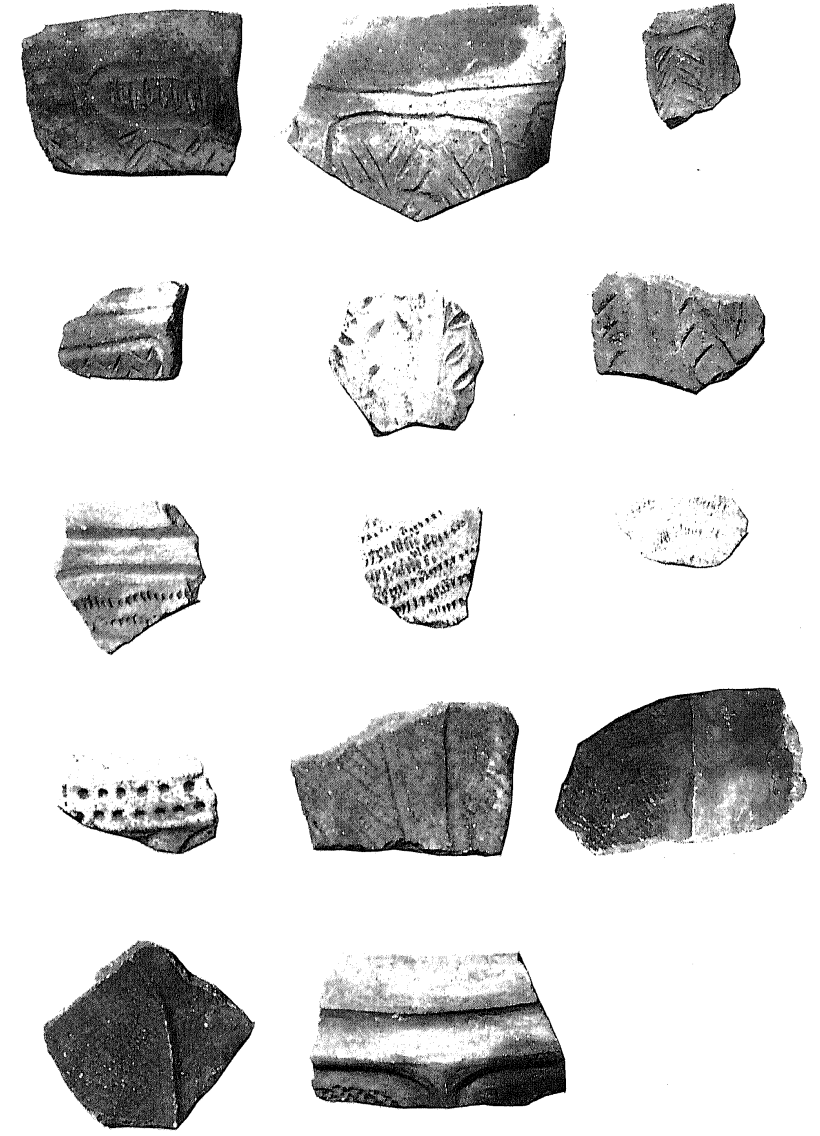
第47図 中谷遺跡出土土器拓影図(4)



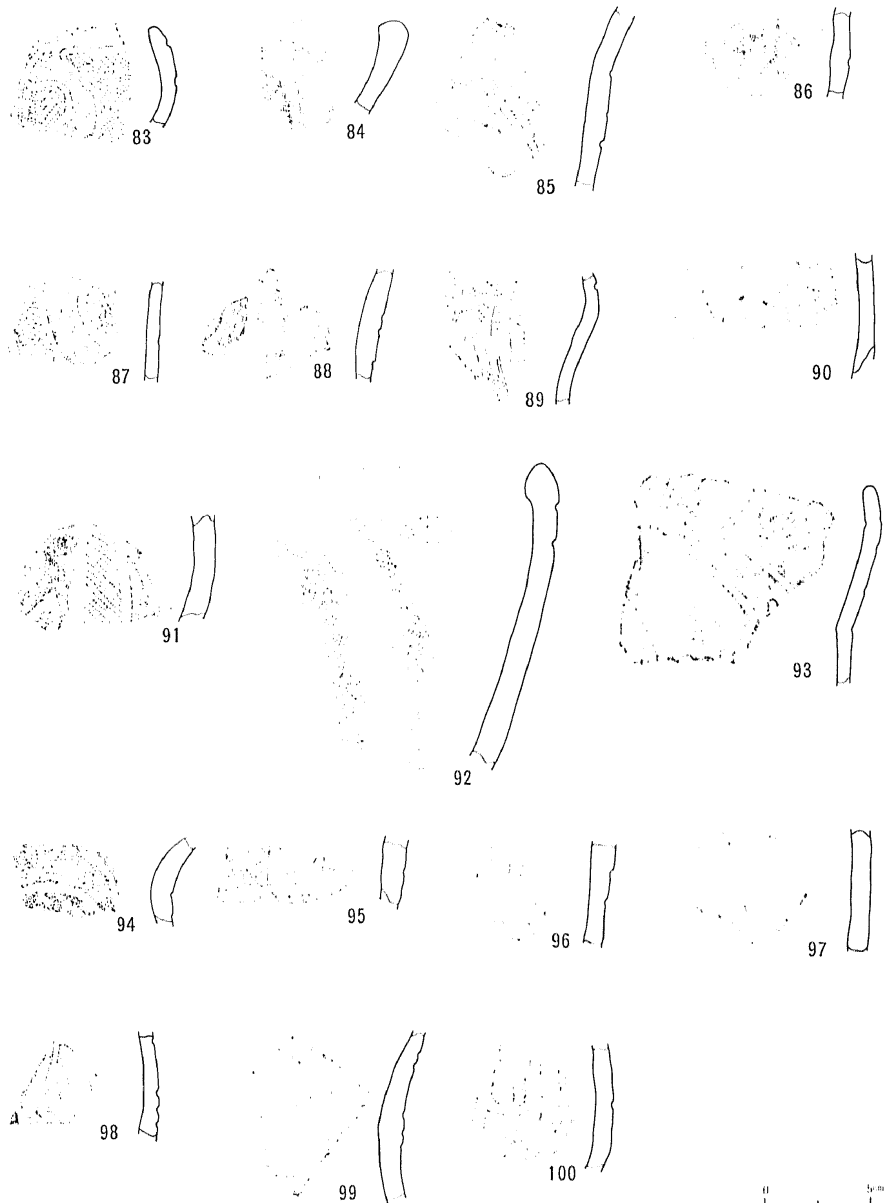
第48図 中谷遺跡出土土器



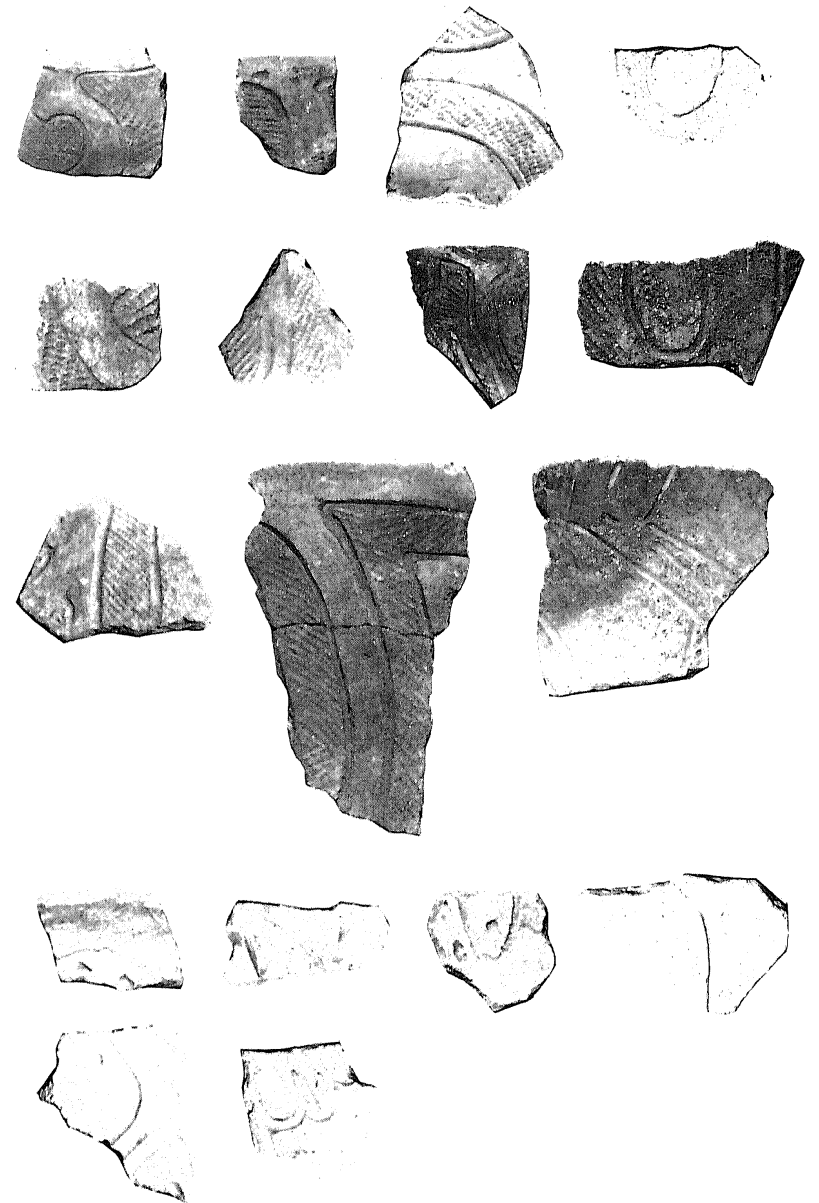
第49図 中谷遺跡出土土器拓影図(5)



第50図 中谷遺跡出土土器

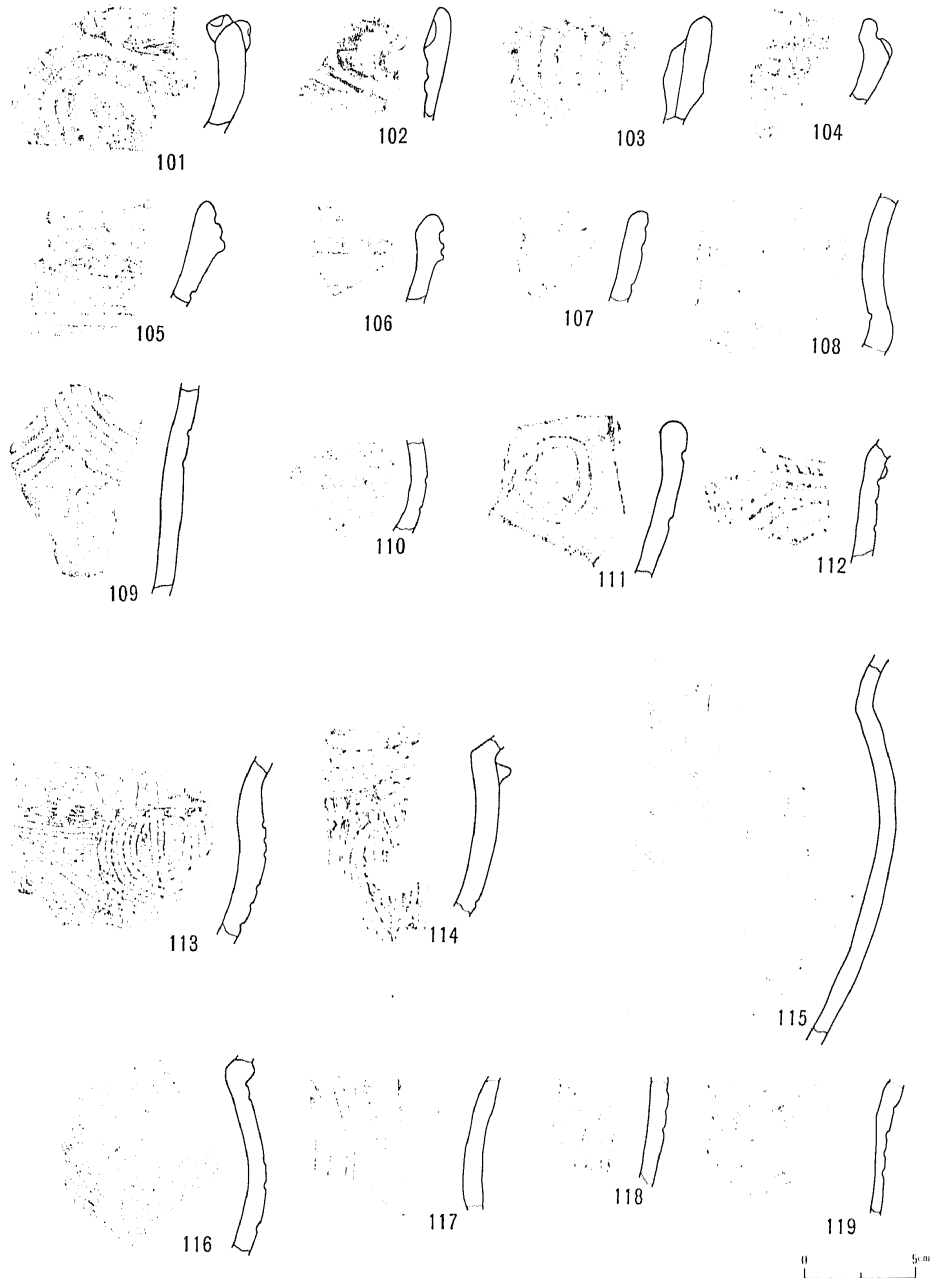


第51図 中谷遺跡出土土器拓影図(6)



第52図 中谷遺跡出土土器

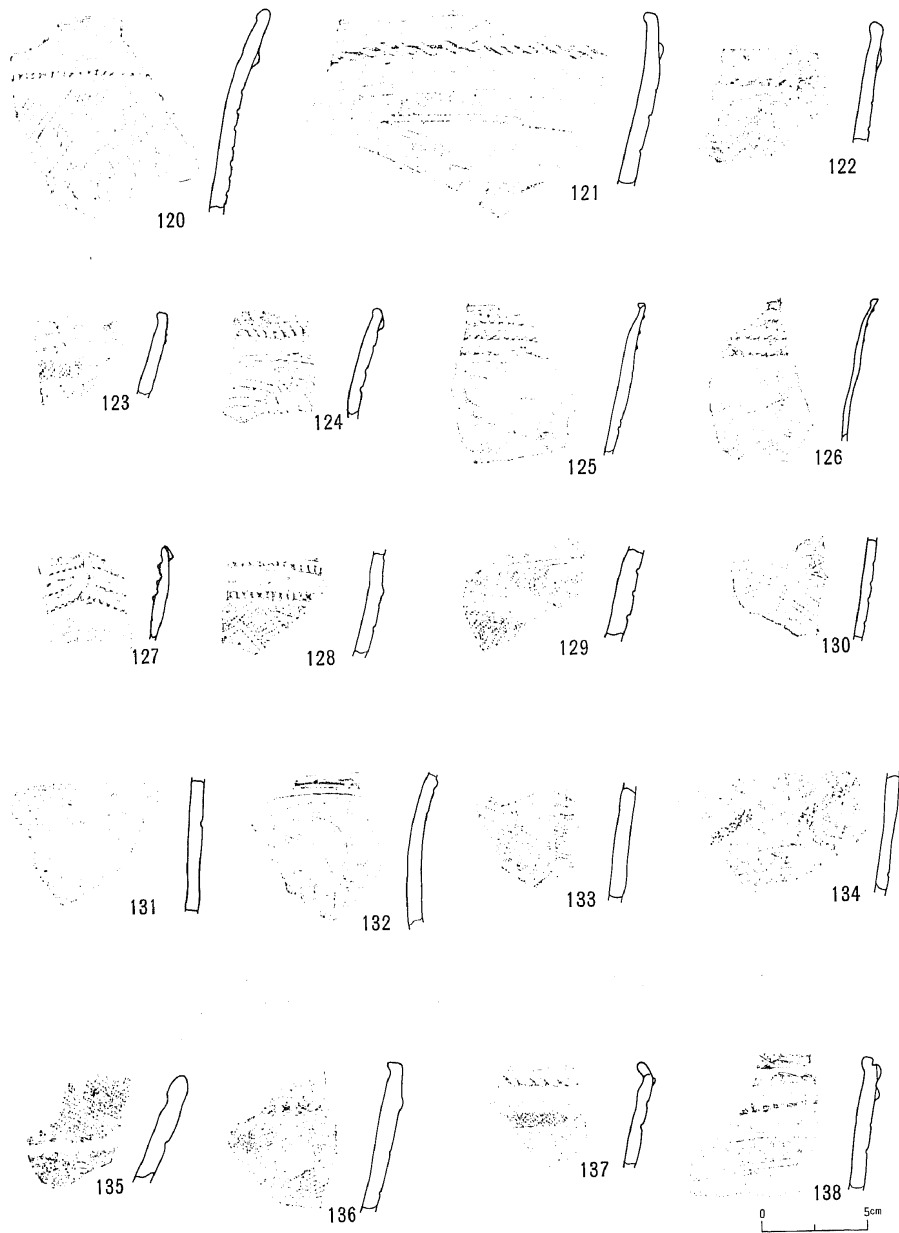
考古



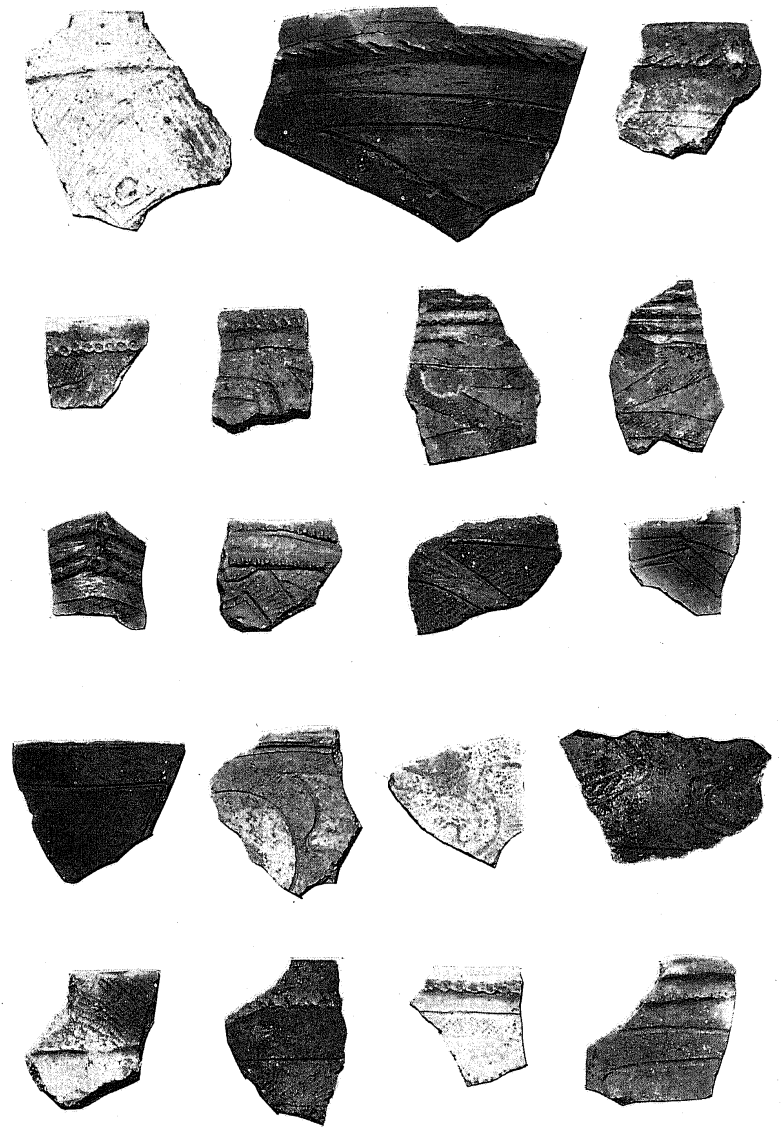
第53図 中谷遺跡出土土器拓影図(7)



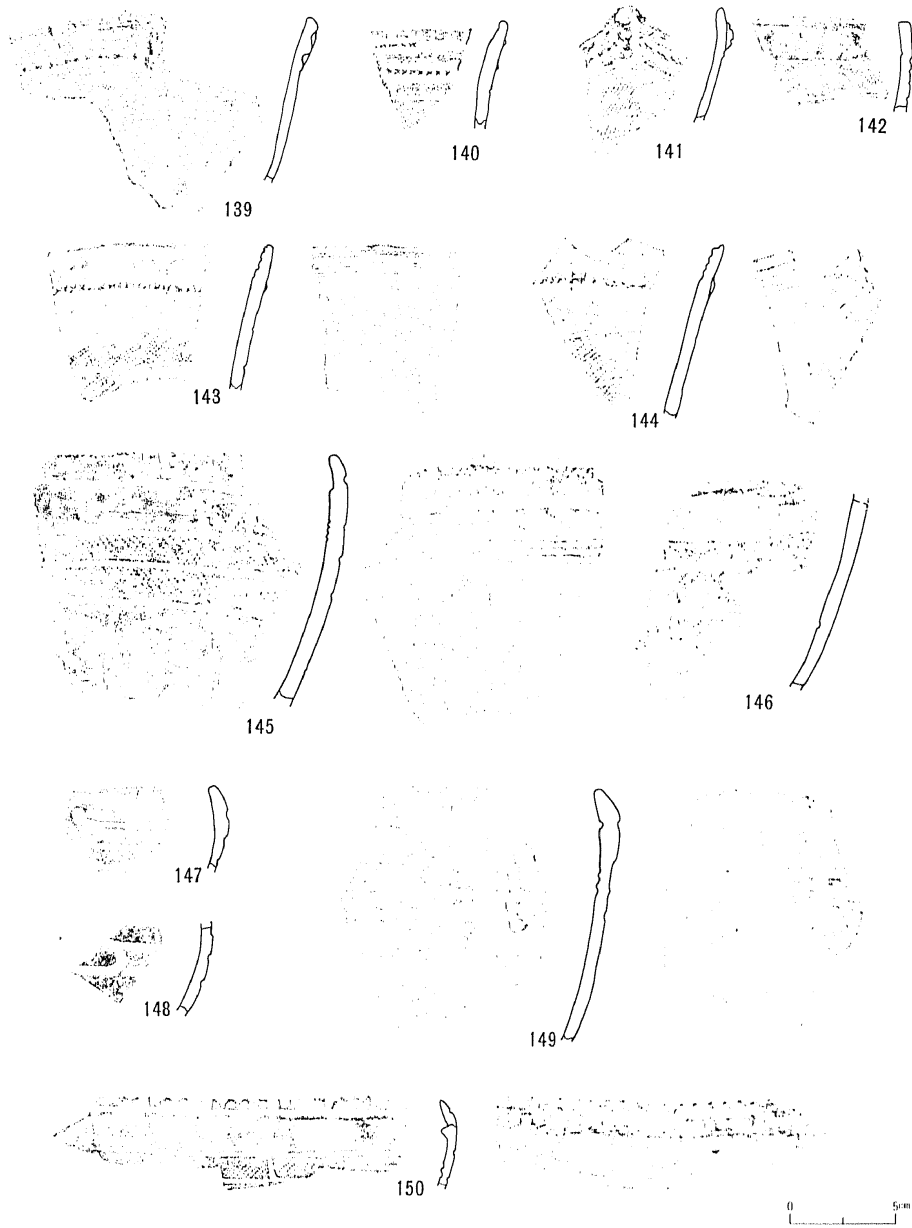
第54図 中谷遺跡出土土器



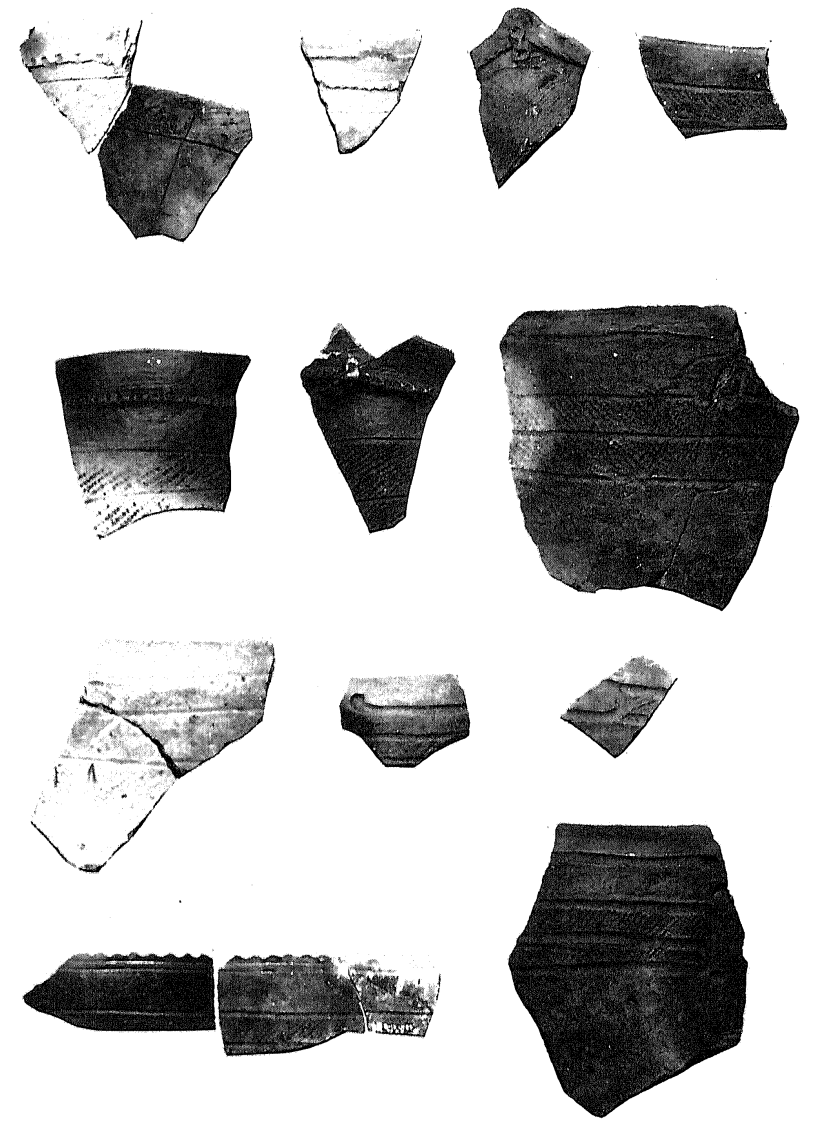
第55図 中谷遺跡出土土器拓影図(8)



第56図 中谷遺跡出土土器



第57図 中谷遺跡出土土器拓影図(9)



第58図 中谷遺跡出土土器